

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870596

研究課題名(和文)大型国際美術展のアーカイヴに関する調査研究

研究課題名(英文)Study for the archival practice on the international art exhibitions

研究代表者

山口 祥平(YAMAGUCHI, Shohei)

首都大学東京・システムデザイン学部・助教

研究者番号：60376910

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、欧州における大型国際美術展のアーカイヴに関する調査を行ない、その現状と課題の考察を行なった。調査において、欧州の下記の3施設を訪問し、資料収集保管業務に関して、現地担当者へのヒアリング(実施主体、組織構成、具体的な業務内容、資料媒体、所蔵数、現状の課題等)を行ない、各施設のアーカイヴの特質と相違を明らかにした。

1, ドクメンタ・アルヒーフ(カッセル・ドイツ)、2, ヴェネツィア・ビエンナーレ・アーカイヴ(ヴェネツィア・イタリア)、3, パリ青年ビエンナーレ・アーカイヴ(レンヌ・フランス)

研究成果の概要(英文)：This research aimed to examine the present situation and problem about the archives for International Art Exhibition in Europe. with the hearing investigation to the 3 facilities as follows to do hearing, "documenta archiv" (Kassel, Germany), "ASAC" (Venice Biennial archives, Venice, Italy), "Archives de la Critique d'art"(Paris biennial, Paris, France) it revealed the characters and differences of each archival practice.

研究分野：美術史

キーワード：美学・美術史 アートマネジメント 芸術情報学

1. 研究開始当初の背景

(1) 大型国際美術展の隆盛

近年、国内外で大型国際美術展が盛んに開催されている。大型国際美術展とは、文化交流あるいは観光産業発展を目的に、国内外の美術作家を多数招聘し、大規模予算を投じて実施される美術展を総称する。主に自治体あるいは大企業が主体となり、都市間競争や地域ブランディングなど、自都市の魅力を向上させるプログラムとして援用し、世界各都市で積極的に開催されている。

大型国際美術展は、国内外から数十万の観客動員を促すため、自治体から新たな観光事業としても注目を集めつつある。国内では、「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」(以下:大地の芸術祭、初回2000年、2012年度来場者数49万人)の開催を皮切りに、2015年までに全国各地に大型国際美術展が拡散している。「あいちトリエンナーレ」(初回2010年、2010年度来場者数53万人)、「瀬戸内国際芸術祭」(初回2010年、2010年度来場者数98万人)等)。

これらは地域において新たな観光事業として注目されるだけでなく、美術における先駆的な展覧会形式としても、評価を受けている。大型国際美術展では、従来の美術展示空間(美術館やギャラリー)だけではなく、地域

の公共空間を展示場所として活用する傾向があり、地域の周辺環境を取り込む作品が新たな作品経験を生み出す契機となっている。元来、このような作品制作の流れは、80年代に発達した欧米のサイトスペシフィック美術の潮流が背景にあるが、国内では90年代のバブル経済崩壊以降、物質的経済的な豊かさから精神的な豊かさへの移行と相まって、美術という文脈のみならず地域づくりの文脈と呼応しつつ、地域に美術展の導入が行なわれ、独自展開を見せている。具体的には、展覧会では、単に美術作品の制作だけで完結するのではなく、作品が周辺環境あるいは条件と呼応し、その場に固有の社会的文脈を吸収しながら、とりわけその場で生活を営む人々の日常に密接に関わりながら制作・展示を行い、土地の魅力の再発見や新たな人の関係性の構築など地域を再組成している点を特徴としている。

このように、国内における大型国際美術展は、公共空間で展開されるがゆえに、美術の枠組みを超えて、社会に対して、新たな視点を投げかける存在として、位置づいている。そこから、新たな「美術」、あるいは新しい展覧会の可能性を掘り起こしている。

(2) アーカイブ構築の必要性: 一過性の祝祭から持続可能なプロジェクトへ

上述のごとく、地域づくりの流れを受けて、国内では、大型国際美術展は盛んに開催されている。開催年数の浅さゆえに、事業運営基盤は盤石とはいいがたい。多くの事業が2年に一度あるいは3年一度の運営体制を採用しているため、予算面から運営組織は一過性の編成となっている。事業運営に従事する人材は開催都度の雇用となり、専門性が高まらず、継続的に事業運営ノウハウを蓄積できない状況にある。また、専属の運営団体が設置されていたとしても、雇用条件が不安定であったり、労働環境が整備されていないなどの理由から、職に定着しない傾向がある。

過去に「継続」と謳いながらも予算や運営など様々な問題から途中で事業を終息させる事例も少なくない。現在、隆盛している国内事例も予算上、運営上の問題が散見され、その持続性は危ぶまれている。その場かぎりの運営を強いられ、事業の検証や知財の引き継ぎしないまま、次の事業開催に至る事例も少なくない。

国内における大型国際美術展は、地域に根ざすことで、美術の新たな時代における表現形式の実験場となっているだけでなく、その土地の潜在的な可能性を掘り起こし、地域の魅力を再発見する事業として注目されている。地域の文化的資産の継承と発展に寄与する

取組みとして、さらなる発展を遂げていくか、あるいは一過性の祝祭として消えて行くか、過去に立脚し、未来を創造する知的蓄積と継承の意志にかかっていると考えられよう。

アーカイブは、人間のあらゆる活動・営為の記憶保存し、後世へと伝える役割を担う。物理的媒体（紙、映像メディア）に人間が生きてきた思考・記憶・情報を外部化する。人間経験の蓄積こそが継承への意志であり、アーカイブこそまさにその意志を再現表象する存在となる。

2. 研究の目的

本研究は、先行事例である下記3件の大型国際美術展事業におけるアーカイブの調査を通して、大型国際美術展の事業運営における知的基盤整備状況を明らかにすることを目的とする。対象施設は下記である。

1. ドクメンタ・アルヒーフ

（カッセル・ドイツ）

2. ヴェネツィア・ビエンナーレ・アーカイブ

（ヴェネツィア・イタリア）

3. パリ青年ビエンナーレ

（レンヌ・フランス）

これらは、大型国際美術展のアーカイブを目的とした施設であり、事業と並走して運営さ

れている。国内には公式に制度的基盤を伴う大型国際美術展のアーカイヴは存在しない。ゆえに、本研究では、欧州の大型国際美術展のアーカイヴの調査を通して、大型国際美術展における知的基盤形成を一助となることを目指す。

3. 研究の方法

本研究の目標として、欧州における大型国際美術展を対象としてその「アーカイヴ」の手法に関する調査を行い、国際美術展のアーカイヴモデルを展望することである。上記を達成するために、現状の各「アーカイヴ」における以下の視点をもって現地調査を行った。

- ・設置主体、組織構成、運営方法、収集資料、整理メソッド、本事業との連携、公開方法。

4. 研究成果

アーカイヴ運営に関わる実施主体、組織構成、具体的な業務内容、資料媒体、所蔵数、現状の課題等に関するヒアリング調査を通して、各施設の特徴と共通点ならびに相違点を整理しえた。各調査対象と全体の概要は下記のとおりである（2015年現在）。

(1) ASAC ヴェネツィア・ビエンナーレ

調査実施日：2013年9月15日、16日

担当者：Marica Gallina

場所：ASAC Porto Marghera

展覧会創設：1895年

アーカイヴ創設：1928年

運営母体：ヴェネツィア・ビエンナーレ財団

組織構成：ディレクター1名、アーキヴィスト2名、図書館司書1名、秘書1名)

(2) パリ青年ビエンナーレ・アーカイヴ

(フランス美術批評アーカイヴ)

調査実施日：2015年2月15日、16日

担当者：Laurence Le Poupon

場所：Archives de la critique d'art

展覧会創設：1959年(1985年終了)

アーカイヴ創設：1989年

運営母体：国立美術史研究所、レンヌ第2大学、美術評論家連盟

組織構成：館長1名、ディレクター1名、アーキヴィスト1名、図書館司書1名、広報1名)

(3) ドクメンタ・アルヒーフ

調査実施日：2015年2月19日、20日

担当者：Dr. Gerd Mörsch

場所：documenta archiv

展覧会創設：1955年

アーカイヴ創設：1961年

運営母体：カッセル市(2015年よりドクメンタ GmbH と統合)

組織構成：ディレクター1名、アーキヴィスト2名、図書館司書1名、秘書1名)

概要

今回の3事例において、資料の整理手法や保存方法において多くの共通点がある一方で、個別の「アーカイブ」の位置づけに相違点があることが判明した。歴史の証左であるドキュメントは、各施設ともに歴史研究者に主な利用されているが、研究利用だけでなくドクメンタ・アルヒーフのように明確な実務サポートを目的として、資料を保存継承する取り組みも存在している。

半恒久的に資料を保存継承していくアーカイブ業務は、実務に従事する専門労働者の雇用費用や資料の現物を保管する物理的空間の維持管理費用等が重なり、高額な維持管理費用が発生する。そのため、どの施設でも、人員、空間などの維持コスト削減が強く要請されている。

ただ、対象の3施設のアーカイブに共通するのは、各実務担当者に通底するアーカイブへの基本認識である。欧州全般において、アーカイブは歴史を共有する装置として、象徴的機能を有している。政策決定の透明性を公開するのは、民主主義社会の証左でもある。大型国際美術展においても、各事業がアーカイ

ブを設置し、資料を保存継承していくのは、まさにその象徴的な歴史機能を踏襲するためとも言えよう。広く共有された歴史への意識、あるいは公共への意識がこれらのアーカイブ事業を根幹から支えている。大型国際美術展においても、事業継承への意志を育むだけではなく、連綿と続いていく公共のための歴史精神こそが、過去の知的営為を次代へとつなぐ原動力であり、意志となるのではなからうか。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

- 1, 山口祥平「インターローカル・アート・ネットワーク・センターの活動について」、文化庁メディア芸術祭シンポジウム、2015年2月5日、国立新美術館、東京
- 2, 山口祥平「大型国際美術展におけるアーカイブに関する一考察」、日本アートマネジメント学会、2014年11月30日、実践女子大学、東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 祥平 (YAMAGUCHI, Shohei)

首都大学東京・システムデザイン研究科・

助教 研究者番号：60376910